

インフルエンザについて（第1報）

－2014/2015年シーズン－

今シーズン（2014/2015年シーズン）もインフルエンザの流行が近付いてきています。

インフルエンザ（Influenza）は、インフルエンザウイルスを病原体とする急性の呼吸器感染症で、毎年世界中で流行がみられています。日本を含む北半球の温帯地域では、毎年12月～4月が流行期間となります。わが国では例年国民の10%前後がインフルエンザに罹患しますが、その患者発生のおよそ大半はこの5か月間に集中しています。特に本格的な流行となる1～3月は、インフルエンザの流行に関連した外来受診者数や入院患者数の急増を招き、また高齢者を中心に超過死亡者数の増加が観察されることも少なくありません。

インフルエンザの臨床経過ですが、典型的な発症例では1～4日間の潜伏期間を経て、突然に発熱（38℃以上の高熱）、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などが出現し、鼻水・咳などの呼吸器症状がこれに続きます。通常は1週間前後の経過で軽快しますが、一般的に「かぜ」と呼ばれていて私たちが日常的に罹患している大半が様々なウイルスの感染を原因としている急性の上気道炎と比べて全身症状が強く、疾患としてのインパクトが強いことが特徴です。

インフルエンザの主な感染経路はくしゃみ、咳、会話等で口から発する飛沫による飛沫感染です。他には接触感染もあるといわれています。インフルエンザを予防する手段としては、まずはワクチンの接種があげられます。また、感染対策としては、飛沫感染対策としての咳エチケット、接触感染対策としての手洗い等の手指衛生が重要です（厚生労働省インフルエンザQ&A：

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou01/ga.html>）。

インフルエンザでは、前述したような典型的な症状を呈する者以外に、たとえ感染していても全く症状のない人（不顕性感染例や）、かぜのような症状のみでインフルエンザウイルスに感染していることを本人も周囲も気が付かない軽症例も少なくありません。たくさんのインフルエンザ患者さんが集まってくる医療施設や、入所者が発病した場合に重症化する可能性が高い福祉施設、また地域の流行の中心となる学校、幼稚園、保育園等の小児の集団生活施設においては、流行期間中は職員も含めてできるだけ全員が咳エチケット、手指衛生を実行するべきです。

図は全国 9,954 箇所の調剤薬局で処方された抗インフルエンザウイルス薬の処方件数を解析して算出された週ごとのインフルエンザによる推計受診者数の推移を示しています。2014 年第 47 週（11 月 17～23 日）のインフルエンザの推計受診者数は 28,968

であり、薬局サーベイランスのインフルエンザ流行開始の指標である3万人をやや下回る数字となっています。翌第48週の休日明けの火曜日（11月25日）の推計受診者数は12,632と前週の休日明けの月曜日（4,440）の3倍近い値となっており、インフルエンザの患者数は更に急増して第48週より流行が開始となるものと予想されます。これは昨シーズンより2週間早くインフルエンザの流行が始まるということあり、12月中のインフルエンザの患者発生は昨年よりもかなり多くなることを覚悟する必要があります。

インフルエンザワクチンの接種はお済みですか？インフルエンザワクチンは残念ながらインフルエンザウイルスの感染を阻止することはできませんが、ある程度発病率を下げることで、罹った場合でも重くなることを防止する効果が期待できます。今シーズンもインフルエンザワクチンを接種しようと思っていてまだ接種できていない方は、急いで接種していただくことをお奨めします。

2014年11月28日
大阪府済生会中津病院ICT
安井 良則

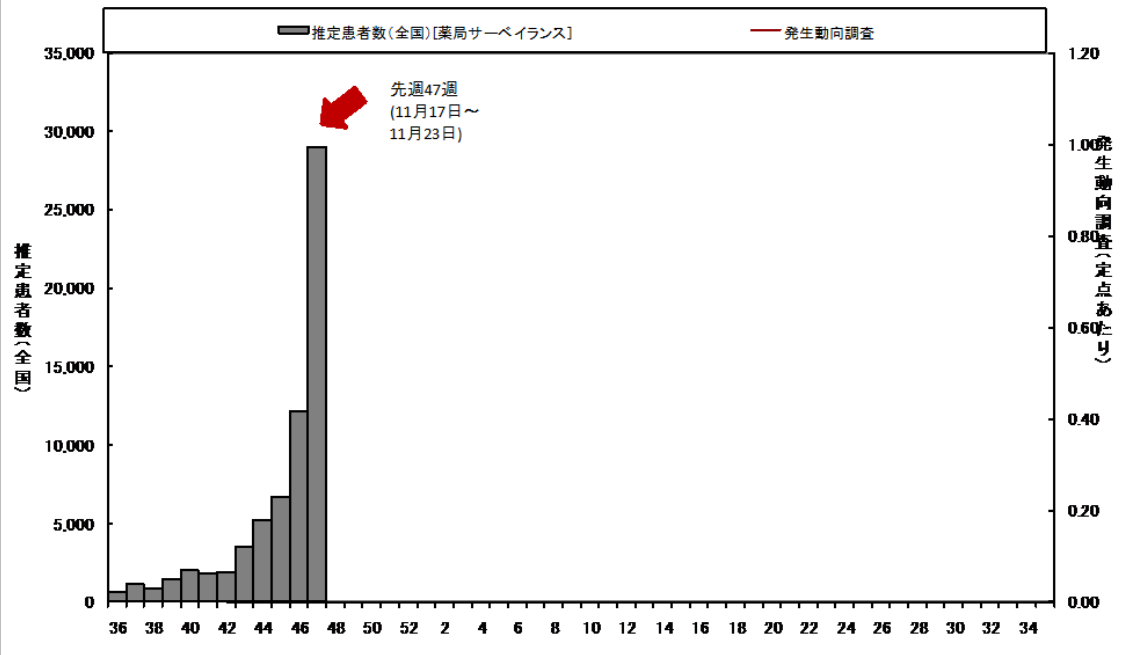


図. 薬局サーベイランスによる全国のインフルエンザ推計受診者数の週別推移 (2014年第36～第47週)